

1. 放送大学開学

(阿部) これまで6回にわたりまして海外の放送大学を紹介して参りました。今日は、最終回、第七回で、遠隔高等教育の今後の方向、大学教育の新しい波と言うことでお話しあいをお願い致します。今日のゲストを御紹介いたします。東京大学の前学長、向坊隆さんでいらっしゃいます。放送大学の副学長の小林靖雄さんでいらっしゃいます。長らくNHKで御活躍をされ現在常磐大学の教授をされております、後藤和彦さんです。東京工業大学の教授でいらっしゃる坂元昂さんです。

いよいよ放送大学、開学でございますが、小林さん御準備で大変だと思いますが、放送大学のめざしている方向をとりまとめて御話していただけないでしょうか。

(小林) 60年4月いよいよ授業開始ということで準備を進めております。御承知のように放送大学は、新しい形の生涯教育を目差した大学という形で出発をしております。この、生涯教育というのは、非常に多様なニーズをもっていると思いますが、大学のそれに対する対応というのは3つのコース、6つの専攻ということで、それらの中をかなりいろいろな専門分野の入りまじった、あるいはそれを総合したような形でのカリキュラムを準備するということに、かなり苦勞を払ってきたように思います。

それから、まもなく放送というメディアを使って大学の授業を結局一般に公開するという形になりますが、そういう面で、新しい面を開いているように私は思っております。

それから、多様な学生さんのニーズに答えるためには、卒業をめざす全科履修生以外に選科履修生、あるいは科目履修生という一般的には聴講生の部類に入るかもしれませんが、これを学生としてやはり受入れる。そういう学生が又希望によっては全科生にふりかわるということも考えられるわけですので、その認定方法等も準備したところでございます。更にもう一つ言いますと、遠隔高等教育すべての悩みでございますが、やはり一般の大学教育というものは教員と学生の、フェイスクーフェイスクの接触の中で学ぶことが多いわけですが、それを少しでも生かそうと言うのが面接授業でございます。6ヶ所の学習センターの中での面接授業、あるいは専任の教員は比較的少ないんでございますけども、専任の先生もしくは講義を担当する非常勤の先生、そういう方々の学生さんに対する学習指導、そういう面もできるだけ強化したいと考えておるわけでございます。今準備をしている中身でひろいあげると、特徴的なものを申し上げるとだいたいそういうことだと思います。

(阿部) 後藤さんは、長らくメディアにかかわってこられたのですが、放送大学が、教育メディアとして放送を使うのは、我国の正規の大学では初めてのことでございますが、海外には、無いわけではない。そうした海外の事例を今まで紹介してきたのですが、メディアの専門家から御覧になりまして、わが国の大学が放送によって高等教育を実施することの意味はどんなものでしょうか。

(後藤) 今、小林先生の方から、生涯教育への対応ということで、その場合、放送メディアを利用されるということは非常にもっともだと思います。そこで御承知の方も多いと思うんですが、日本でも放送メディアの教育への利用というのは、高等教育のレベルではありませんが、長い

歴史があって、それはそれなりの役割を果たしてきただろうと思います。それで今の段階というのは、放送そのものが大きく変わろうとしている段階で新しい波という事が言えるとすれば、放送それ自体が新しい波の時期にさしかかっているわけですね。そういうメディアとしての転換期に日本で高等教育を放送を使って行う所に私は非常に新しいモメントがある、展開のきっかけがあるのではないかと。それはあまり諸外国ではまだ活用されていない事で、日本でそこら辺に眼をつけたらどうかという気持ちが前からしておりました。

（阿部）この問題をさらに掘り下げて御話をしていきたいと思います。坂元さん、今まで各国の放送大学、海外の放送大学の状況を見てきたわけですが、いよいよ日本の放送大学も始まるわけで、期待も大きいし、不安も大きいわけです。世界の状況を踏まえて、今後の見通しをまとめていただけないでしょうか。

（坂元）そうですね。放送大学、最近の言い方では遠隔教育のひとつの形になるんでしょうけれど、遠隔教育と言うのは、遠く離れた所に学生を置いて、中央のセンターから、教材を流し学生は自分の居場所で勉強して何等かの資格をとっていく仕組みですね。その中で独立大学型といって、正規の独立の大学の働きをするのが沢山あります。イギリスもそうだし、韓国、タイ、パキスタン、ドイツとかスペインもそうです。中国も似ています。その中のひとつが日本の放送大学になるわけです。中国ではラジオとかテレビをうんと使っているけれども、それ以外の国ではラジオ、テレビを使ってもそんなに多くはありませんね。その点で、日本では、先程、後藤先生がおっしゃったように、放送の基盤が十分あってその上に乗ったすばらしい教材が出てくるという、中国がやっ

ている放送を使う特徴を持っていますし、一方ではイギリスを始めいろいろな国がやっているマルチメディアを使った教授といいますか。スタディーセンターに集まってテレビを見たり実験的な指導もやるし、スクーリングもやる。いろんなメディアを組合わせて行う指導法という特徴を持っています。そういうものの組み合わせが、非常にうまくいく大学になるんじゃないかというふうに思っております。

（阿部）教育方法の問題は、後で更にお話ししていただきたいと思います。向坊さんは、永らく最も伝統的な大学の教授をなされ、また総長もなされて、そういう伝統的な大学のもっている問題、又、その強さ弱さを身近に御存じだろうと思います。今度、こういう新しい型の大学が出てまいりました時に、新しい型の大学というものの新しい方向ということも、伝統的な大学とのかかわりというものもあると思うんですが、その辺をどうお考えになっていらっしゃるでしょうか。

（向坊）そうでございますね。何と申しましても放送大学は、開かれた大学という意味で、伝統的な大学と一番特徴的に違ったものになるわけでそういうものとしての期待が持たれていると思うんです。ただスクーリングやテキストと組み合わせるとしても、放送を使う事によっての制限みたいなものが自然とあるわけですし、例えば理科の実験をとまなうような教育は非常に難しいわけですね。始めは講義とテキストですむ範囲は限定せざるをえないと思います。

その他いろいろ考えてみれば、難しい所もいろいろありますので、そういうものを克服して発展して頂きたいと思っているわけでありまして。数年前にドイツの放送大学の学長にお会いしたんですが、日本の放送大学は世界で注目されている。ふたつの点で注目されている。ひとつは、

計画が非常に大きい。他の国でやっているのよりも、完成すれば非常に大きい計画だということで期待されている。もうひとつは言い出してから10年立っても、まだ始まらないという事でした。ともかく掲げられた理想に向かってひとつ発展をしていただきたい。

私は準備段階ではいろいろ御相談にものりましたが、いよいよ実際に始まってからはよく存じません、大変いい先生を沢山集めることが出来たという事は承知しております。一番大事なものは先生ですから、そういう意味で大いに期待している所です。

2. 開かれた大学

(阿部) 今、皆様方のお話の中でいくつか共通点があるように思うんですが、まず一番の大きな共通点は、「開かれた」ということではないかと思います。それは、放送大学によって学習を継続される方々は、それによって、時を開く、場を開く、世代を開くということになるのではないかと思います。そういうことになりますと、放送というものの開かれたメディアということの意味がまず、ひとつのポイントではないかと存じます。

それから又、印刷物というものに致しても、時間を越えて、いつでも読めるし、郵送でも届けられる。後藤さん、開かれた大学、開かれた高等教育の機会ということに対するメディアの意味というようなことはどうお考えですか。

(後藤) そうですね。放送の特徴そのものがメディアの特徴として、すべての人が容易にアクセスできるというところにあるわけです。だがその前提として受信機が普及しているという事がないとできないんであり

ますが、御存知のように、日本は家庭に2台目、3台目のテレビという時代になっていますし、又テレビそのものの受信機の性能も良くなっておりますので全体が整っているわけです。ですから又、テレビも30年たって、テレビの利用に関して利用する側のノウハウっていうものも、ある程度蓄積がある。そういう前提がやはり大事な所だろうという気が致します。その前提に立って、誰でも学習をしようと思えばできるという、そこまでは整っているわけで、その学習しようとする人の意志がどれぐらいちゃんと維持できるかと、あるいはそれを、どのように周りからサポートするかというところが肝心な所ではないでしょうか。

(阿部) 坂元さんのお話、それに今の後藤さんのお話もございますように、放送というものが教育情報を伝えてくれることは、間違いがないわけであって、開かれた大学の、開かれたという所まではいい。その先になると二つの考え方があるように思います。世界各国の中、例えば中国のように、それがただちに教育の手段であるという捉え方が一方にあり、それは放送がキャンパスの代りになるという考え方かと存じます。

それからイギリスのように、モチベーションを高める役割を担い、教育そのものに関しましては印刷物で行なう。いうなれば放送は印刷物による学習を補充するという考え方があるようでございます。我国の場合は、どちらの方向に重みがいくと考えていますか。

(坂元) 中国の直接教授型とイギリスの補充的な型をとりますと、その真中より中国寄りになるだろうと思います。つまり、さっき向坊さんがおっしゃったように、立派な先生方がテレビを前にして、講義をされますね。それ自身がひとつの主な教材になるわけです。中国の場合は、本当に八割か九割位の勉強の中でのウェイトをテレビ、ラジオが占めてお

ります。中国の放送大学の教室があって、そこに50人ばかり、学生さんが並んでまして、先生なしで、テレビだけをみながら、ノートをとって勉強する。あるいはラジオだけを聞きながらノートをとって勉強する。本当にテレビだけで直接教えているという状況があります。出てくるテレビは先生が黒板に向かって話しているだけです。しかも、この黒板の文字と指先と指し棒だけが出てくるわけです。めったに人間の顔が出てこないんですね。

日本の放送大学の番組は、実験番組とか予告番組でみなさん御存じのようにすばらしい演出がなされているんです。現地ロケーションをしたり、講義をされたり、問答をされたり、いろんな工夫を凝らされている。そういう点でイギリスのオープンユニバーシティがやっているモチベーションを高めるような演出をされているんですね。

私が真中より、中国よりと言いますのは、一番いい線をいってるのではないかと思います。ほめすぎかも知れませんが、いい先生が出て、しかも専門のテレビ、ラジオの演出家がついて、先生方のいい所を引っ張り出すでしょう。現地に行ってインタビューをしたり、それから歴史的なものだったら実物をとります。実物はそのまま持ってこれませんので映像で映さなければいかんと。そういうものを出していく。立派な先生のいい講義プラス、演出がからまって、効果をあげる。これが日本の放送大学の大特色じゃないかと思うんですけど。そういう方向にどんどん内容が進んで育つといいと思いますね。

（阿部）小林さん、坂元さんの言われた通りにうまくいくことを期待していいですね。システムの上では、向坊さんが言われるように、先生中心でございますね。先生が中心で、それから専任のディレクターも、優

秀な方が来ておられますが、その組み合わせ、それから、スクーリング、通信指導もある。教育のバランスはどのような仕組でやってもらえるんですか。

(小林) 大学全体としての意志統一というのは、今出来たばかりですから、中々そういう議論は、多少はしますけども、ひとつの統一作戦でやろうという所までは、なかなかいっていない。

ただ全体として感じますのは、印刷教材というものは、非常に重要なメディアで、これはしっかり書かなきゃいかん。そういう印刷教材に書かれている内容の非常に重要な所、あるいは非常に理解しにくい所。こちらを特にテレビでございますけれども、実物その他を使って、要点を見ている人間にも充分理解できるように、やっていこうということで、ここらが実際どうやったら本当に理解できるようになるのか経験も少ないこともあって、プロデューサー、ディレクターに非常に御協力を願っているわけであります。しかし、かなりの程度、担当する先生の御意志によって、やっていくという形で努力をしている。そういう方向へいつているだろうと思います。ですから、まさに坂元さんのおっしゃったように放送授業というのは、決して刺激だけではなくて、それにも重点をおいて、それによって理解を深めてもらおうと。そういうふうに願っていると思います。

(阿部) 今の小林さんの話は、大学の中の学生に対する教育は、ひとりの教員が中心になり、それからメディアの製作者の専門性を生かすというお話がございました。後藤さん、この構想でまいりますと、今言われたような登録学生でなくても、誰でもスイッチをひねれば見れるわけです。又本屋に行けば教科書を売ってるわけです。開かれた大学という面

でいきますと、これは、どうなのでしょう。

（後藤）さっき、坂元さんの話を伺っていて感じた事なんですけど、日本は中国とイギリスの軸のやや中国よりのところ、それは、当然そうだろうという気がするの、ふたつの理由なんです。一つはテレビの歴史がやはり違うということなんです。一般の人達が経験したテレビの時間の歴史が違う。それに関連してテレビを作ってきた人達が積み重ねてきたテレビの番組を作るための力が違うんです。これは、人びとが日常生活の中でどれくらいのレベルのテレビを見ているのか、そのことによって放送大学の演出レベルを決めないといけないと思うんです。

もうひとつは、見る人がどの程度強制された状況にあるかということなんです。純粹に家庭にいる場合は、全く強制されていないわけですから、他の普通の番組に比べて、放送大学の番組が、演出上見劣りするとしますと、面白くないということではなくて、両方の力にあるレベル差があるわけですから、普段見ているテレビより下だとやはり強制されませんね。どうも面白くないということになりかねないと思うんです。ですから、そこのところが非常に難しい所だという気がします。放送大学が抽象的にこういう機能を果たすからいいという事ではなくて、社会が持っているテレビのレベルの違いというものによって、放送大学の番組の演出という、演出なんかいないという方もいらっしゃるかも知れませんが、そういうことではなくて、表現のもっている力を維持する条件が変わってくるという気がしますね。

（坂元）今、大変面白いお話を伺いました。例えば中国でもフルタイムで学習する学生が企業から選り出されて給料もらって勉強しなければならない。これは、強制されているから一生懸命勉強するんですけれど

も、知識待業青年というんでしょうか、高等学校を卒業して大学の入学試験に入らなくて、——しかも放送大学は原則として、勤労年数が2年以上なければ入れないという条件がありましたでしょう——そこで、それまでぶらぶらしているといえますか、失業した青年達がいるわけですよ。そういう青年達を救済するということで、中国のラジオ・テレビ大学がそういう青年達を吸収しはじめたんですね。事業所から給料を貰って学習するのではないという意味で、日本の放送大学の学生と似たような形が中国にも生まれてきているんです。

その学生達が果たして今の中国の放送番組で勉強をどのぐらいまで続けていけるか。今は、総人口の中の学生が少ないから、一生懸命勉強して、資格を取れば将来にメリットがあるわけです。それで、一生懸命やるけれども、それがだんだんなくなってきた時点で、あと何年、一生懸命が続くか心配なんです。それに比べるとイギリスは、BBCの放送の知恵があるし、アメリカですと強制なしで、番組を一生懸命見るわけで、番組の魅力で御客様を引っ張っていく事があると思います。

(阿部) 今のお話に関連いたしまして、アメリカのCPB、公共放送局協会が、やった調査で面白いのがあるんです。というのは、どこかの大学に登録して——アメリカはコンソーシアム型で、放送は放送局が流しますけど、それによる学習を単位認定するのは大学がやる——単位をとる人、それから単位はとらないけれども教科書を購入して、教科書を参照しながら番組を見る人、それから単に番組を見た人、というのを調査した。歴史の番組で面白い番組があるんですけど、それを使いまして数の調査をしているんです。その歴史の番組を見て、テキストで学習して、大学の単位を取った人は、5,000人位しかいないのに、テレビ番組と

して見た人は250万人位いるんです。テキストも30万部近く売れているというんです。仮に放送大学というものが継続教育機関だと致しますと、5,000人に着目すべきものなのか。それとも将来にわたっては、単位としてというよりも、知的な関心で学習し、あるいは教養的に視聴だけする人々に重点を置くべきでしょうか。そういう事を考え合わせると今後の放送大学はどちらへ向かうのでしょうか。放送大学というのは、学生だけが見ることを考えていればいいのでしょうか。

（向坊）放送大学が開かれた大学であるだけに対象をしぼるのが非常に難しいわけですね。いろんな人に聞かれるんですが、放送大学は開かれているという意味と同時に、生涯教育という意味あいが強い。しかし、生涯教育を希望する人に三種類あるんですね。

第一はみんなが教育を受けている期間に受けなかった人が、今聞きたいということなんです。開発途上国の人には、そういう人が非常に多い。第二は、社会が変化しますから、技術の進歩や何かで変化致しますから。それについていくための再教育っていう意味で、たえず受けていなければならない。そういうのも大事ですね。第三は、もう少し理想主義的というか、人間はみんな一生学習すべきものである、それに適した番組が次々と出てくるのが望ましいという考えと、三つあるようですね。

だから、今度の放送大学がどれにしぼっていかれるか、始めから鋭くしぼるのは、僕は難しいと思うんです。少しおやりになったら相当いいものが流れると思うんですけれども。それで世論調査をする。それから放送大学は入り易い代りに、やめるのも簡単ですからね。単位取る所まで行くのは、かなり意志の強い人でなければいけないような気もするんです。やめる人も出てくる。そういう状況をみながら改善と同時に対象

もしぼっていくということになるんじゃないですか。

(阿部) そういう事になりますと、小林さん、さっき小林さんがおっしゃったように、大学の卒業をめざす全科履修生というような人がいる。それに対して今の柔軟に変化する社会に対して適応をはかるため、自分の仕事に役に立てるため、資格も単位もいらないけれど、知識がほしい。これは日本の権威がやっているのだから、私は聴講しますよと言ってやる人もきつと思います。こうした目的ごとに分けるとすれば、卒業証書をめざす人、向坊さんのおっしゃるセカンドチャンスの人、再教育ないしリフレッシュという目的の人などを比べると、応募者の割合はどうなっていますか。

(小林) 今の学生の種類としては、全科履修生を4,000人、初年度はですね。それから選科生としてあるまとまった科目をやるか、あるいは個々の科目をやる科目生か、これは特に区別はしておりませんが、これが6,000人で、完成年度は全科生が7,000人、選科と科目が1万人というような比率でいくわけで、トータルとして、学生さんの数は、たまっていますから当然全科生の方が多くなります。選科生は一年単位でいきますし、科目生は学期単位でございます。

三学期制の学期単位ですから、これは、1万でずっと続いていくという形になっております。今のお話で、学士号を最終的にねらっているという人、これは、向坊先生が言われた第一の分類の人で、大学教育まできちんと受けたいということでいく。これも、いろんなキャリアの人がいるだろうと思います。

選科・科目生は、これまたいろいろの人がいる。職業人、あるいは家庭の婦人でも、こういう所である特定の分野、ある特定の科目だけを、

特に職業人なんかは、ある専門分野でこういう所をもう一回勉強しておこうということで、また再教育等に会社でも使うかも知れません。大学に入らないでもこういう勉強をする人も、かなりいるんだろうとは思いますが。従来までいろんな教育需要調査を、放送大学でも行っていますが。それでも、選科、科目履修生にもならないで、しかも、興味をもってるんで聞きたい、自由に聞きたいというのが大きい比率なんです。問題は、そういう人達の学習の態度も違うでしょうし、あるいはレベルが非常に違うだろう。そういうものに対して全科履修生は、一応基本科目とか、基礎科目から順々に入るようになっております。それに対して、ある科目を選んで聞く選科・科目履修生の方は、いろんなレベルの人がいるんだろうと思います。これら全てにうまく合うような中身というのはこれは、仲々、難しいんで。今の段階では、基本科目とか基礎科目あたりは勉強の導入的な科目なんで、内容を、レベルを落とすのではなくて内容を分り易くやって くれと、学長は非常に強調しているわけです。

専門の科目になりますと、〔1〕とか〔2〕とか順序がありますけれども、ある程度、独立的なんです。ですから聞かれる講義の名前と、講義要綱みたいなものだけで、ちょっと聞かれて全然レベルが高かったとかですね、いろんな問題が出てくるだろうと思うんですね。これはうちの大学の宿命で、長い間の結果等を見ながら、序々に変えていかなければならないだろうと思っています。大変難しい事だと思うんです。

3. 放送大学と学習の方法

(阿部) 坂元さん、日本というのは、基本的に学歴社会、試験社会でご

ざいましょう。試験がないと、けじめもつかないし、レベル、仕分も、つかないという面もあるかと思いますが、逆に言いますと、学歴による仕分とか、試験によるいろいろな弊害がある。もっと自由に学習したいという意欲そのものに答えようではないかという意図も放送大学にはおありになるんだろうと思うんですが、外国の例では、そういう方向はどくなっていますか。

(坂元) そうですね。外国の場合も、通信指導だけでやります場合には、テキストが市販されていると一般のお客さんが買えますけども、公開性は低くなりますね。けれども、放送を使う場合には、マスメディアですから、誰でも放送から学ぶことができる。そうすると、その部分は、いろいろなお客さんが利用できます。ですから外国の場合で生涯教育として、勉強できるのに非常に有利な位置にいるのは、中国とかイギリスとかパキスタンとか放送を比較的多く使ってる国々なんです。ところが大変残念なことなんですけど、そうした国々では、放送の波の制限がありますでしょう。BBCが自分で放送している中に割り込んで公開大学用の番組を出さなきゃいけないとか。中国も一般テレビを出している中で使うとか、非常に制限が苦しいわけですね。中国なんかでは、比較的多く使われているけれども、それでも苦しいわけです。そういう点で日本の放送大学は、専用チャンネルを持っているでしょう。これは絶対世界に誇るメリットですよ。そういうもので放送を出してますから、一般のお客さんがついてくる。ただし試験で縛りませんから。今、NHKから類似の大学講座が出ているでしょう。あれと、同じような形で見えて、勉強はするけれどもそれで消えてしまう。そして又、思いだしては帰って来るといふ形の人が出てくるかも知れない。僕はそれでもいいと

思うんです。資格をとる人は、正式に全科目で取るし、あるいは科目の単位を取って、将来、各大学との互換制が出来た時に、それが生きるような形に楽しみを残しておく。そういうものでなくても、番組に力があれば、テキストがなくても番組で勉強してそれからあとでテキストを見て、面白いから正規の科目履修生になろうかということが出てくる。実はイギリスの公開大学は10年以上も経験があるわけです。10周年記念を大分前に行ったのですが、その時にそれまでのイギリスの公開大学の実績を分析しまして、いろんなメリットを取り上げたんです。そのメリットのひとつに、大変感心するのがありまして、「公開大学でやっている教育内容の水準の高さを周知せしめる」という特徴が上っているんです。ということは、普通の学生でない人が、放送番組を見て、——学生の勉強時間からすると、10%位ですが、それでも週に30何時間、放送が送られておりますから結構、接触する機会があるんです。——それを見ましてこんなにいい番組なのかと言ってむしろモチベーションをおこされてガッチリした勉強にはいつていくことがあるんです。日本の放送大学も、放送を見て、こんな難かしいんじゃ、私はついていけないという人がいるかも知れないけど、逆にこれは難かしくても勉強する価値があるテーマだと、入ってくる人が結構いると思うんです。

生涯教育と普通の大学の教育との相互乗り入れに手を差し延べることが、あるいは出来るんじゃないかという気もしています。

(阿部) もっと端的に言えば、おそらく放送大学の番組を見て放送大学に入ろうという人、さらには今まで悩んでいたけど、放送大学での学習に触発されて伝統的な大学で本格的に勉強しようと、そういう人もおそらく出てくるんじゃないかと言うことなんですね。一方、後藤さん、新

聞なんかを見てましたら、放送大学が出るということになりましたら、NHKの市民大学講座が面白くなったと言う話なんですね。

(後藤) やっぱり、そういう相乗効果もあるんですが、大切なのは印刷物ですね。

(阿部) NHKの市民大学講座も出しています。そういう補強と言うのは、その放送つくる方から見ますとどうなんですか。印刷物と相補うものなんですか、それともそれは印刷物は補助で番組だけの力で分らせようというのですか。

(後藤) それはその番組が何を目標にしているかということだろうと思いますね。ですからある特定の概念を学習させるという事になりますと、ものにもよりますが必ずしも放送だけで解決するのがいいというふうには考えないわけですね。そうすると放送と何らかの形のプリントに定着したものの両方で定着させる。学習をですね。そういう事もあるでしょうし、それから全くそういうことではなくて、動機づけそのものが目的であれば番組だけで結構です。ですからいろんな形があるんです。ただ放送大学といいましょうか、高等教育レベルの学習の場合は、私は放送だけと言うのはちょっと無理だと思うんです。高等教育レベルの学習に放送を取り入れる。だから放送だけで全部やらないといけないと考えるのは、ちょっと狭いと思うんです。世の中にたくさん手段があるわけですから、学習の内容によって目標によって考えればいい。放送大学だから、こういうふうな形のテキストでなければいけないと決めるのがおかしいと思うんです。そこは本当に教科なり、あるいは担当される先生なりとこちらのチーム、作る方のチームの考えで最適のメディアの組合せを考えるという事があっていいと思うんですね。それはこの教科

に関しては、この形だけでもこっちには違うというふうな自在な形の方が本当はいいんじゃないでしょうか。

（向坊）科目によって放送とスクーリングとテキストの組み合わせのウェイトの置き方が、科目を対象と考えている人達、そういう意味では違っていいんじゃないでしょうか。

（阿部）同じ放送と言いましても、テレビ、ラジオで違うと思いますし、スクーリングにしてもそれがある科目と知らない科目とあると思うんです。小林さん、何かそれをさっきおっしゃられたテレビ、ラジオ、それにスクーリングの組合せで何か面白いものがあるようですね。同じ科目にテレビ、ラジオ両方を使うとか。

（小林）それは語学の方ですね。語学の方でメディアとしては、テレビ、ラジオ両方使って、ある所までテレビを使い、あるいはラジオを使い、またテレビに変えるとか、そういう形で一応やろうという事で実際準備をしているものもあります。それからテレビとラジオのメディアを決めたのは、かなり前の計画段階で原案が出来ていたということもありまして、なかなか先行の段階までおりてきますと、だいたい同じ数でやれということになりまして、専攻間で融通なども多少はつけたんでございますけれど、例えば、先ほど向坊先生のお話のありました自然科学関係の科目などは、殆どテレビを希望されています。数学等はテレビでなくともと言っておられますけど、しかし、これもいろんな今までのいきさつから、自然科学系も何科目かはラジオでやっていただくという事になっておりまして、今後はかなりディスカスして各科目の中で、やはりテレビがいいんじゃないかという科目には、テレビをあてて、ラジオで十分できるもの、それからラジオの効果があがるもの、そういうのには

ラジオをもっていくとか。最初の原案どおりとか、あるいは全体的を平均的にということのないようにもっていかなければいかんだろうと大学の中では考えております。

(阿部) それともうひとつ、人間的接触っていう問題、さっきお出しになりましたが、伝統的大学ですと、やはりだんだん上に上っていくにつれてゼミナールをやりましたり、実験をやりましたりするわけなんです。放送大学の場合ですと、特定の科目にだけスクーリングがあるんですね。スクーリングは、どういう時にやるのが効果的だとお考えでしょうか。

(向坊) 人数から考えまして、スクーリングは、僕はあったほうがいいし、是非欲しいと思いますけど、非常に難しいでしょうね。ことに理科系なんかは、伝統的な大学では、上級になってくると先生1人対学生5人とか6人とかになりますけど、そこまでは、放送大学ではとてもできることではないんです。接触といってもかなり大勢を相手にした接触ということになりますから、やはりここらしい方法を工夫されるしかないと思うんです。それは録画なんかは、非常に楽になりましたから、そういうものも活用されるということでスクーリングの不備を補っていくとか、何か独特の方法でなくしていかなければならないと思うんです。

(小林) もうひとつの考えは既存の大学がこの大学のいくつかの科目を、単位として認めると、そういうことになるように御努力願いたいと思うんです。うちが教養学部ですから、相手になる学部は教養学部的なところですが、そこの中の数科目を放送大学の授業で単位互換をしようということで、お話を進めております。中身を十分分っている方が、それぞれいまして、或は検討していただかないとだめで、60年4月

から実際に授業が出まして、テキスト等も市販されていく、そういうものを使って十分、検討されて今後はもっと多く協定等を結んで正式にも単位互換をやりたいと思っております。

(阿部) 今、小林さんの前向きのご発言がございまして、放送大学の単位を他の一流大学がその単位として認める。放送大学がそれ位いいものをつくることは、ひとつの方向でございます。しかし同時にそれにも限界がある、例えば実験的なものは既存の大学のようには出来ないとか。これは外国の例で参考になるような典型的な例には、坂元さん、御存じの中でどんなのがあるんですか。

(坂元) ちょっと思い出すのは難しいんですが、例えば中国ですと工場の中に教室があります。その工場に勤めていらっしゃるベテランの方が実験指導をする。学生は工場にきて実験を学ぶとか、そんな例はあります。

(小林) 今の向坊さんのお話で特に理科系の科目の面接授業ですね。これは一応設備的には、自然系を中心とした実験室というものを一応学習センターが設けておりますが、その中でどういうものを選ぶかですね。特に初年度、60年からまず自然系実験っていうのがありまして、これは、中身で言うと物理、化学、生物、地学なんかみんな入る、基礎的なものを拾い上げて5週間でやろうということなんです。ですから先生もそういう分野の人を一つのセンターについて、3人なり4人なりを準備して当面やるという計画をしておりますが、実験台なんかの関係から普通の教室は40人単位の教室なんですけれども、実験室を使うために25人位しか入らないんじゃないかということで、準備している所です。どうしても実物等を手に取りデモンストレーションでもいいから、その場

で見て、実感をもたなければ自然系の科目としては困るというお話が強いもんですから、今、その担当者が一生懸命苦労してるんです。

もうひとつお話があった他の伝統的大学で準備してますいろいろのものを単位に認めてもらうような、そっちの学生がうちの授業を取って単位を認めると同時に、うちの方からも本当は出掛けたいわけです。当面は、あるいは伝統的大学からうちの授業をとり、試験等はうちでしますが認定したものをむこうの大学で認定してもらう。いわゆる単位互換です。かなり話がすすんでいるのは、当面はある大学なんですけど、これもどっかの学部全部の科目ということではない。

(阿部) スクーリング、他の大学の単位、昔の単位そういうもののほかにも、組み合わせるものはあるでしょうか。

(坂元) イギリスの公開大学では、実験というと、大きな設備を用意して集まってやらなくちゃいけないという発想を、伝統的な大学では、従来もっていました。ところが、実験で何を学んでいるのか、これを分析しますといろいろな操作や測定をやっているけれども、その技能の習得は必ずしも大きな装置を使わないでも小さな装置でできるんじゃないか。そうすると、実験を通して学生に学ばしたい技能を取りだして学ばせるために、小さな「実験キット」と称しておりますが、——非常に小さな仕組のシミュレータみたいなものも入っております——そういう一種の実験学のカリキュラムを検討して、集まらないで自宅で実験しながら学習できる。そういう発想をしています。その「実験キット」を家庭に送って家庭で実験します。勿論大きなものとか、高価なものとかは集まってしなければいけないんで、スクーリングに集まって勉強するわけなんです。

4. 学習センターとコミュニケーション

スクーリングの問題で、私ちょっと面白い体験をしたんで、お話ししたいと思います。この間スコットランドへ、夏のスクーリングを見に行きました。イギリスのオープンユニバーシティです。5、60才近い男の方がいまして、私は先生だと思ったんです。「いや、学生」というわけです。お年寄が学生さんなんですね。それで、「どの位おいでになってますか？」と言いますと「毎年、私はスクリーングを回っています。去年はウェールズ、今年はスコットランドのスクーリングだ。」それで、「どうして、そんなに回るんですか。」そしたら「私は勉強をして卒業したくない」というわけです。とにかく、みんなと触れあって、キャンパス代りですよ。普通の伝統的な大学だと、キャンパスがあって、その中で講義をさぼって、御茶を飲んだり、クラブ活動をしたりして、学生さんが育っていくという面がかなりあるでしょう。そういう面を求めてスクーリングにきているお客さんがいて。ああ、面白いなと思ったことがあるんです。

スクーリングのファンクションは、確かに実験をすとか、見のがした講義をスタディセンターに行って、もう一度見てみようとか、チューターの指導を受ける以外に、友達同志と付き合うためです。スタディセンターをある程度開放すると、つまり遠隔教育は、キャンパスのない大学です。キャンパスのない所にキャンパスをつくるとすればスタディセンターだ。そこでお互いに生徒同志触れあわせるといことなんです。顔と顔が触れあって楽しく、一旦心理的なつながりが学生同志の間に来ると、そこが面白い事なんです、離れていて、例えば、電話でやりとりしても一緒にいるがごとくに心理的な効果が上るわけです。いろん

な実験で確かめられているんですけど。

「我々という意識」ができる場合には、たとえ電話で話をしても、いつも面と面と突き合わせているがごとくであると。「わたしたち」という意識と、「あなたは、わたしは」という意識では、顔を付き合わせた時と離れた時とで、問題が起きた時の問題解決の協力程度が違う。相互理解の程度が違うという事があるんですね。という事を考えますと、一旦集まってキャンパス代りのスタディセンターでの人間間の付き合いが出来れば、その付き合いをコアにして広がった時、電話などでのチュータリングとか、——外国なんかではカナダのアサバスカ大学とか電話を使っていますね。——そういう電話でのチュータリングが人間の心と心をつなぐ効果を持っている。時どき実際集まるというように、キャンパスライフをいかにして遠隔大学のシチュエーションの中に持ちこむかという事です。これは、非常に大事だし、そのためにはチューターが実験を厳密に指導したり、放送大学で行なわれてくる主な講義についての解説に心を砕くだけでなく、それも大事なことだけれども、それと同時に、一緒に飲んだり、食ったりというと語弊があるけれども、そのようなチャンスをかなり広くもっていた方がいいという気がします。

（阿部）そういう点では、日本の放送大学は、よその遠隔大学の多くが、仮物でやろうというのに比べまして、自前の放送局、自前の番組制作ばかりでなく自前の学習センターを持っているのは強みだけれども、数が限られているから通うのには遠いという事もあるでしょう。自前の学習センターは自分の巣が出来るという点では日本の場合は大変強力なんではないかと思います。さらにセンターの機能を広げて、電話もあるでしょうし、あるいは、このごろ発達したテクノロジーを活用すると、

東工大さんのように本部と学習センターだってもっと密接な関連をつけることができるでしょう。そういう方向で、何か新しい手法を使う計画があるんですか。

(小林) 私、個人で阿部先生なんかと一緒にニューメディアをいろいろ使えないかと研究中です。とにかく、こういう異常な財政再建の時代ですから、なかなか簡単にいかないんです。しかし、例えば今の面接授業、とくに離れています前橋の学習センターあたりは、先生を御願いして、行ってもらはなければならないんで、大変なんです。向うの学習センターに、学生さんが、集まってくれば双方向のテレビで、丁度、東京工業大学でやっているような光ファイバーでも使って、千葉なら千葉の面接授業に結んでしまう。向うを見ながらこっちひとつで講義を両方つなげるだろうし、いろんな質疑応答も出来るだろうということも当然考えられるだろうと思います。それから今の学習のグループは、いろいろな事を伺っていますと、大変必要なことと思います。これは無理につくらせてやるんじゃなくて自然発生的にできてるんだらうと思いますが、やはりそういうものを我々が関心をもって大事にして、その中で大変孤独な学習をしなければならない人なんです。そういう者がお互いに励まされ、しかも実際の勉強の上でも効果があるという形のもの。我々もちょっと呼ばれた場合に、もし時間があれば出ていってお話をしなきゃいかんと思います。そういう制度的なものではないかも知れないけど、非常に大事な、気を配らなきゃならないという点があるだろうと思っております。

(阿部) こういうような新しい事の導入というのは、ある意味ではうさん臭いと思われるような点もあるでしょうし、やはり伝統的大学側から

の応援がないと、難しいじゃないかという気も致します。しかしこういうことをやると、伝統的な大学の方でも何かにつけて参考になるんじゃないかと思うんですが。いかがでしょうか。

（向坊）私もそう思いますね。大学からの協力も必要だし、やっぱり大学には相当いい刺激になりますからね。大学の方にもいい影響を与えるだろうと思いますが、スタディセンターの充実っていう事がスタートしてから一番の大きな問題になるんじゃないかという気がします。

（小林）かなり、サブセンターみたいなもので、これは公的な施設——公民館とかを使い、その御協力もいただいて、比較的近いところに、いくつかずつ。今のセンターは丁度、地域センターみたいなもので、実際の学習センターをもう少し、拡大する。そういう協力を公的な機関などと連絡をして、しかも公的機関に連絡するだけじゃなくて、やっぱり、近辺にある大学のご協力もいただいて機能拡充するということをやりますと、今の6つですと、ちょっと、足りないですね。

（向坊）足りませんね。大学だけではなくて、公民館とかいろんな政治的な協力も必要なんじゃないですか。

（阿部）放送大学を、伝統的な大学が大学として認知する決め手は何だとお考えですか。

（向坊）そうですね。ひとつは社会に強いかどうかという事が、ありますね。もうひとつは質の問題でしょう。どういう質のものをなさるのか。

（阿部）どうもありがとうございました。放送大学の将来は、一にその質にかかっているという皆様のご認識のようでございます。またそのなかで、一面は番組の力という問題もございました。又一面は学問の府と

しての質という、もっと本質的な問題も提起されました。そして、又カレッジライフという問題も指摘されました。たとえ離れていても、学生のみなさんが、放送大学を母校として誇りに思えるような、そういうものに放送大学が育っていく事を祈念して、このシリーズを終りにしたいと思います。本日は、お忙しいところ、有難うございました。